

レジュメ構成

■論文の目次構成 ■各章・結論・考察 ■図版出典、参考文献

論文の目次構成

<序論>

第1章 本研究について

- 1-1 研究背景
- 1-2 研究目的
 - 1-2-1 富田玲子の設計思想と手法の解読
 - 1-2-2 比較検証を通じた富田玲子の社会との関わり方の解明
- 1-3 対象作品及び研究方法
 - 1-3-1 対象作品
 - 1-3-2 使用文献
- 1-4 本研究の位置付け
 - 1-4-1 既往研究
 - 1-4-2 本論文の位置付け
- 1-5 富田玲子が手がけた作品

<本論>

第2章 富田玲子の半生と価値観形成の様相

- はじめに
- 2-1 富田玲子の半生
- 2-2 価値観形成過程とその時代背景
 - 2-2-1 幼少期、少女期
 - 2-2-2 東京の景観変化
- 小結

第3章 富田玲子の設計思想と表現手法

- はじめに
- 3-1 富田玲子の建築観
- 3-2 富田玲子の場所に対する視線と表現手法
 - 3-2-1 場所に関する基本的思想
 - 3-2-2 色彩計画
 - 3-2-3 形態
 - 3-2-4 平面計画
- 3-3 富田玲子の人に対する視線と表現手法
 - 3-3-1 建築オノマトペとは
 - 3-3-2 人と空間の直接的関係に関するオノマトペ その具体的手法
- 3-4 富田玲子の装飾
 - 3-4-1 手法の独特性と、富田の意識
 - 3-4-2 ドーモ・アラベスカの左官彫刻
 - 3-4-3 笠原小学校の装飾
 - 3-4-4 富田玲子の建築における装飾の位置付け
- 小結

第4章 建築家と社会～分析の比較対象～

- はじめに
- 4-1 18世紀～私的建築受容期～
- 4-2 19世紀～社会的客観性要求の発生期～
- 4-3 19世紀末の社会への回路の模索活動
 - 4-3-1 19世紀の芸術論の概要
 - 4-3-2 アーツ・アンド・クラフツ運動
 - 4-3-3 アール・ヌーヴォー
 - 4-3-4 装飾の基盤の変化
- 4-4 近代精神と近代建築
- 4-5 近代以降の建築家による社会との関わり方
 - 4-5-1 村野藤吾
 - 4-5-2 石山修武
- 小結

第5章 富田玲子の社会との関わり方～比較分析を通して～

- はじめに
- 5-1 富田玲子の社会活動の源泉
- 5-2 富田玲子が築く、他者と作品の回路
- 5-3 富田が築く回路と社会の関係
- 小結

<結論>

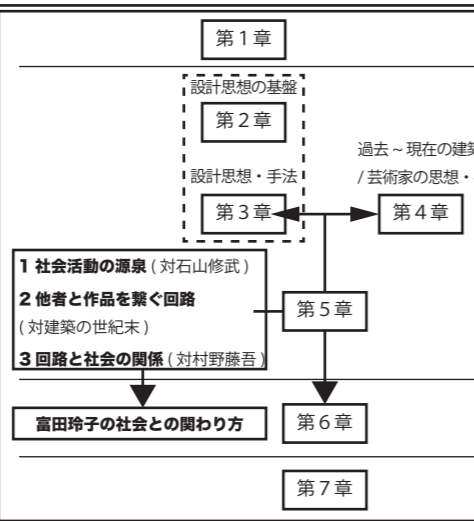
第6章 結論

第7章 考察

参考文献

図版出典

[巻末資料]



第1章 本研究について

1-1 研究背景

本研究は、象設計集団への関心から始まった。象設計集団の評価には、「象」の世代の捉えようの無さ / 署名のない強さ (匿名性) 「建築にしては無駄があり、一見してわけの判らないものが結晶している。*1」 「独自の方向を探し求めている人たち *2」(順に東野芳明、宇佐美圭司、多木浩二) など、建築界の中でも象の特殊性を表現しているものが多く見られる。一方で象自身は、目指す建築は「人の気持ちに寄り添った建築」*3 であるとする。ということは、本来「無駄」とされるところに人間に必要なものがあると象が考え取り入れているのではないだろうか。それは何だろうか。またなぜ多くの建築はそれを無駄と切り捨てているのか、関心が深まった。そこで、象設計集団の設立メンバーの1人である富田玲子に着目した。それは、彼女の関わった作品に、具象的装飾など建築界からすれば異端に感じられる要素が多く見られると思ったからだ。そこで、富田玲子の思想・手法、そして作品の社会での成立の仕方を明かそうと思い、富田玲子の作家論を書くこととした。



図1. 富田玲子

1-2 研究目的

- (1) 富田玲子の設計思想と手法の解読
 - (2) 比較分析を通じた、富田玲子の社会との関わり方の解明
- 本論文では、富田玲子の設計の基盤となっている考えたと、その手法を明らかにすることを試みる。最終的にはダイアグラムとしてそれを示す。それと、「18世紀から近代の作り手の社会との関わり方」を比較分析する。それによって、富田玲子が建築と社会をどう関わらせる建築家なのか、解明する。

1-3 対象作品及び研究方法

既往研究について	対象作品
建築家・富田玲子についての既往研究は存在しないが、象設計集団に関する論文・論考として数えられるものには次のものが挙げられる。本論文では、これらを既往研究とする。 松葉一清「象設計集団一反近代のかたち」『近代主義を超えて〔現代建築の動向〕』鹿島出版会(1983) 松葉一清「よみがえる原風景ー原宏司、象設計集団」『ポスト・モダンの座標』鹿島出版会(1987) リチャード・ウェストン「象設計集団と場所の生態学」『建築文化』彰国社(1993.10) 布野修司「地球に根ざしてー象設計集団」『建築少年たちの夢ー現代建築水滸伝』彰国社(2011.6)	[竣工年 仕事名 [所在地]] ・1974 ドーモ・アラベスカ [東京] ・1980 宮代町コミュニティセンター進修館 [埼玉] ・1981 名護市庁舎 [沖縄] ・1982 笠原小学校 [埼玉] ・1998 矢野南小学校 [広島] ・2001 石川県九谷焼美術館 [石川] ・2009 津山洋学資料館 [岡山] インタビュー前の電話で確認した、富田が主な設計担当者となった五作品+富田の言説が多く採集できた名護市庁舎・進修館を扱う。

論文構成

●第2章では半生と、基本的価値観を作った原体験またその時代背景について述べる。●第3章では、オーラルヒストリーと文献から富田玲子の設計思想と手法を明らかにする。第1節では基本的な建築観を明らかにする。第2,3節でそれぞれに対する考え方と表現手法を明らかにする。第4節では、富田が「なくてはならないおまけ」*4 と述べた装飾に対する考え方と表現手法を明らかにする。●第4章では、第3章で述べた富田の設計思想・手法の比較対象について明らかにする。18世紀から20世紀にかけて作り手が他者(社会)とどのように関わろうとしてきたか明らかにする。●第5章では、富田の社会との関わり方を、三段階に分けて明らかにする。「①社会的活動の源泉」「②他者と作品を繋ぐ回路」「③富田の回路と社会の関係」に分けて明らかにする。用いる比較対象は順に①石山修武②主に鈴木博之「建築の世紀末」晶文社(1977)を用いて明らかにする 18世紀から20世紀の事例③村野藤吾とする。

第2章 富田玲子の半生と価値観形成の様相

富田の幼少・少女期に、自然が多く広大で穏やかな場所で得た空間体験が、富田の設計の基本になっていることを明らかにした。そしてその空間が、都心部への人口・産業の集中や高度経済成長を通じて大きく変化していったことを述べた。高密度で均質な団地や、超高層ビルが増えたことを富田は肯定的には見ておらず、経済・効率一辺倒の建物に対して「敷地外との関連性や使い手の気持ちを考えていない」と批判精神を持っていることを明らかにした。

第3章 富田玲子の設計思想と表現手法

富田が挙げる良い建築像
 ・「小さな建築」:人間が生まれ持った五感が伸び伸び働く。外界との繋がりが感じられる。それによって孤立感や不安感がない。
 ・機能的かつ快適であり、土地・人の気持ちに合っているために人の前向きな感情を湧き起こす建築。
 これは、前章で明らかにした、富田の幼少・少女期の空間体験を通じた実感から生まれた考えである。この、「人間が空間から得るべき良い内的世界と、空間条件」に対する富田の考え方を『集落的感覚』と呼び、次のように定義した。

『集落的感覚』:富田の考える、理想の空間及びそこに生まれる使い手の感覚。使い手が、空間にいることを通じて得られるであるとする前向きな内的世界。感覚。及びそのような感覚を持つために必要だと考えている空間の特性への考え方。

3-2 から3-4にて、具体例を用いて分析を行い、比較分析の準備とした。また、富田の設計手法について以下のようなダイアグラムにまとめられた。

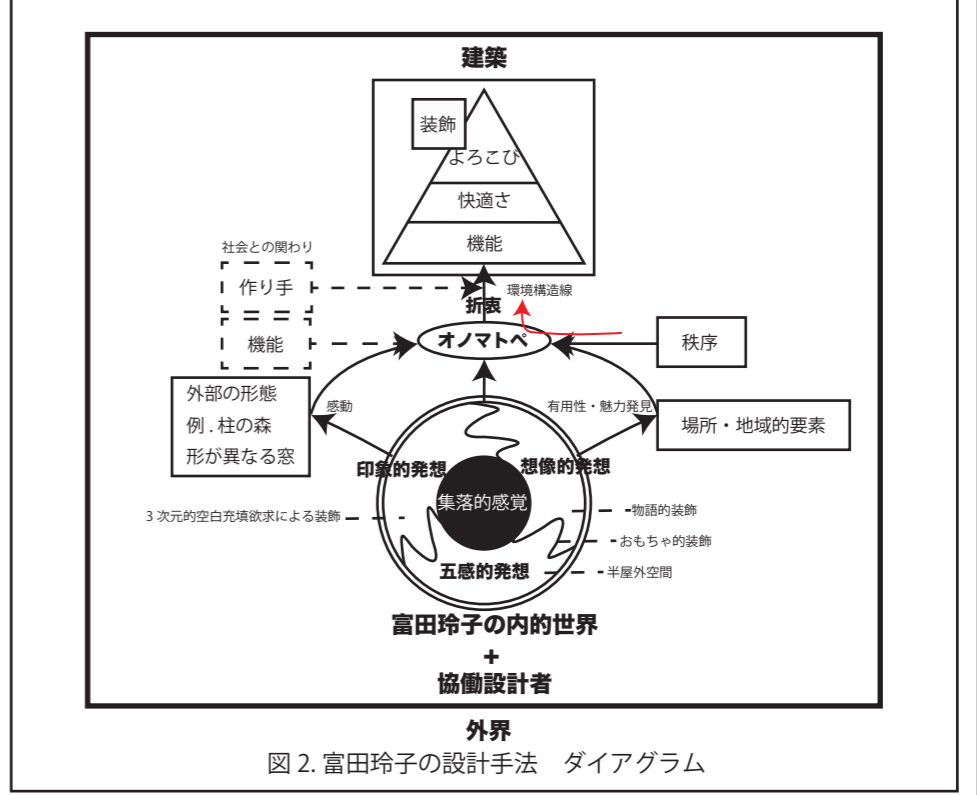


図2. 富田玲子の設計手法 ダイアグラム

富田は建築設計を通して「人に心地よい空間」を作ろうとしている。そこで、「心地よさ」の定義・造形化する根拠の発見のために、自身の集落的感覚の内省を行う。そこで印象的・物語的・五感的発想の元に、敷地周辺や集落的感覚、自らの感情イメージから造形を集める。それらを、オノマトペ(「べたぺた」など感覚的な言葉で説明する、富田の設計手法)の元で機能・秩序と、設計の都合に合わせて折衷する。また、協働設計という手法を取るによって建築の造形の多様化を図り、より多様な人にとって心地よい空間を作ろうとしている。このダイアグラムをもって、富田玲子が幼少・少女期に培った感覚や、感性、物語の想像等自らの内的世界の内省を行いながら設計を行なっていることを示した。

第4章 建築家と社会～分析の比較対象～

鈴木博之「建築の世紀末」晶文社(1977)を元に、過去の作り手が社会と作品との間に築こうとした回路の変遷を辿った。また、第5章で比較に用いる石山修武と鈴木博之の情報(第5章で述べる)をまとめた。

第5章 富田玲子の社会との関わり方～比較分析を通して～

5-1 富田玲子の社会活動の源泉

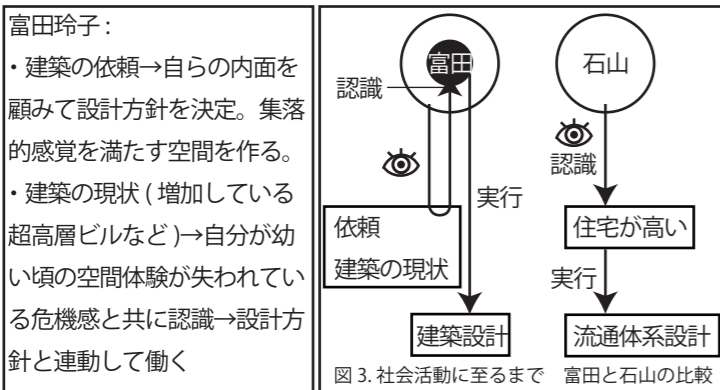


図3. 社会活動に至るまで 富田と石山の比較

石山修武:「住宅が高い」という、自らの外部に存在する問題を認識。→社会活動の手法の拠り所は「合理性」。新流通体系を作る。

「外的要素」と「個人的な内的世界」に接点を持たせたものを社会活動の源泉とする。富田は、合理性だけではない領域で社会活動を行う「非合理の表現者」的側面が強い建築家と言える。

5-2 富田玲子が築く、他者と作品の回路

鈴木博之「建築の世紀末」晶文社(1977)で明らかにした、「作品を社会の中に成立させる試み」=「他者と作品の回路を作る試み」の変遷の中に、富田を位置付ける。

様式的美(外形に属する美。絶対的な美の形態が存在する。)の**追求 19世紀**

生命的美(人と事物の営みの中に生まれる美)の**追求(意識的領域)**

①**アーツ・アンド・クラフツ運動**:中世の「事物と人の親密な関係」を取り戻そうとする。それは、事物に込められた中世的意味(文化的・宗教的・歴史的意味など)により達成されていたとして、装飾を媒体とし中世的意味の復活を図る。

既に中世的意味は伝わらなくなっており、失敗

②**アール・ヌーヴォー**:文化的連続性がないものを取り扱うようになる。「生命力、官能性、異国趣味」といったイメージを、曲線が多い装飾に籠める。

個人の情的世界で解釈されるものなので、客観的確認が出来ない。「手間の多さ・製作費の高さ」のみ工業化社会に認識され短命に終わる。

形態の背後の「意味」が消滅。

③**自然界モチーフの装飾**:全ての人が共通認識できるモチーフとして、自然が台頭する。

機能的美の追求(意識的領域)

④**20世紀、近代**:機能や構造に合わない装飾は排除される。近代精神、建築:全ての人が共通認識できるものが、機能・目的性・科学的論理の構造しかなくなったとして、それらが台頭。しかし、出来た建築は建築や芸術の専門家しか理解できない「エリートのコード」を使っているとチャールズ・ジェンクスにより批判される。*

富田玲子:生命的美的追求 無意識的領域への突入

なぜ生命的美か:ドーモ・アラベスカの装飾の具体的形態に関しては学生に好きにやらせていたこと・大工や職人にある程度自由にやらせたことから。また、それを受けた「それで作る人も楽しくなった」という発言に、絶対的美の形式でなく、事物と人の営みに価値を見出す姿勢が現れているから。

中世に存在した社会の精神共同体が無くなってから、富田玲子も含めた「作品と人を繋げる回路」の変遷について左段で明らかにした。その内容を、次のようにしてまとめた。

宗教などの社会全体で共有できる精神共同体が無い中、
①、②:個人の外部にある概念(文化・歴史的意味や、イメージを表す言葉)の認識を通した繋がりを求めた。
③:「自然」という概念認識を通した繋がりを求めた。
④:個人の内部にあるが、客観的確認ができる「論理的構造」の理解を通した繋がりを求めた。
富田:心地よい身体体験を作るために、個人の内部にあり客観的確認ができない「五感」「感情」の発生による繋がりを求めた。

これらのことから、次のことが言える。①～④が人の意識的領域の稼働つまり「理解」によって、事物と人を繋げようとした。その理由は、全体化・普遍化を目指していたからと思われる。普遍化を目指す社会的活動の元で、多くの人による理解を求める客観性への志向があった。その中で、意識的領域を扱うことは重要であった。

一方富田は無意識的領域の稼働によって繋げようとした。富田が志向したのは、純粋な身体体験だった。それは、外的刺激とそれに対する反射的な反応で構成されており、無意識的領域だけで使い手と建築の結びつきは完結する。そんな身体体験を作ることを目指した富田が、知識など意識的領域の稼働を必要とするものを志向することはあり得なかった。また、近代建築のように、身体的実感が得られないような理論的構造を拠り所にすることもなかった。富田が他者と作品を繋ぐ回路としたのは、身体的体験に伴う「感情、感覚」という無意識的領域だった。

富田が「人間にとって心地いい空間」という、無意識的で客観的確認ができないものを作るには、私的な感覚を根拠に全体性を描くしか手段がなかった。さらに、協働設計という形を取ることで、より多くの人の感覚を満たすことが可能な空間を作ろうとする、帰納的な手法を取っている。

5-3 富田玲子が築く回路と社会の関係

これまでの作家が、意識的領域の稼働による回路を選んできたのは、それが客観性を持たせるために必要だったからだ。それでは、無意識的領域の稼働という手法を選ぶと、社会と回路の関係はどのようなのだろうか。

本節では、それについて明らかにする。そのためにまず、「心地いい」という人の無意識的領域への働きかけを、対社会客観的根拠と共に成立させた村野藤吾の手法と富田の手法を比較する。それによって、富田の手法の特質を明らかにする。また比較して明らかになったことを基盤に、富田の回路と社会の関係性を明らかにする。

村野と富田の共通点は、人に心地よい空間を作ることと志し、細部から空間を発想していったことである。2者にとって、装飾やディテールなどがその手段であった。一方で、人と建築が親しくなるための形態の根拠を求める場所が異なっていた。

村野藤吾:人が建築に親しさを感じる「美的なもの」「触りたくなるもの」を作ることにより生み出される、施主の社会的功利を根拠とした。

富田玲子:協働設計者と共に集落的感覚を基盤に考えた使い手の心地よさを、唯一の根拠とした。施主に対しても使い手に対しても提示するものは変わらなかった。

次に、村野の社会的功利を考えたアプローチでは生まれぬものと考え、富田の回路の特質と社会の関係を明らかにする。

富田による、人間が生まれながらに持つ五感・感情を基盤とした空間を前に、人は皆等しく後天的な社会的功利などから解放される。誰もが、初源的な姿に戻り純粋な空間体験が出来る。

富田の建築の回路は、社会というよりも、1人の人間の集まりとして関係を築いた。それを、富田は初源的感覚=少女的感覚を、その姿のまま把握することによって実現しようとした。

『少女的感覚』:富田の生まれながらに持つ感覚、初源的感覚。少女的感覚を持って、故郷での空間体験を通し集落的感覚を培った。

第6章 結論

富田は、どんな社会への関わり方をする建築家か。

①社会活動の開始

他者が使用する建築の制作を依頼された時に、富田は自らの空間体験を内省し、使い手の主体的体験を第一に捉えた空間を志向した。

→自らの内面世界を出発点に作品を作り出すという点で、表現者の側面を強くして社会に関わった。

②他者(社会)と作品の回路

主体的感覚「心地よさ」を実現するために、自身の集落的感覚の内省を行う必要があった。それは、富田の初源的な感覚、つまり少女的感覚を社会活動に反映させていることを示している。その結果、「五感・感情・印象」といった無意識的領域を回路とする設計となった。またそれと併せて、協働設計を行うことにより帰納的に「心地よい」空間の造形を行った。

→社会的意味から解き放たれ、誰もが生まれながらの初源的感覚に立ち戻れる空間を作ろうとしてる。

③富田の回路と社会の関係

社会には、客観性を持って確認できない無意識的領域を扱うことに対して厳しかった。それに対して富田らは、コミュニケーション等を用いて実現を図った。

以上のことから、富田は「**内省の帰納による、少女的感覚の社会的表現を試みる非合理の表現家的建築家**」であるという結論が出た。

第7章 考察

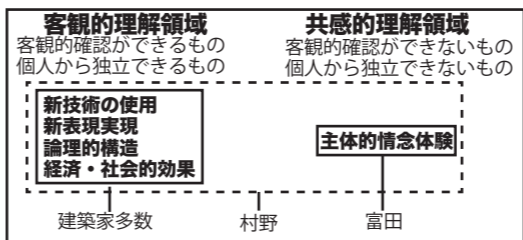


図4. 現在の、建築と社会を繋げる領域

現在の、建築家による建築の流れにおいて、富田玲子はどのような立ち位置にいて、富田の存在は何を意味するのだろうか。それを考えるためには、まず現社会における建築の特性を考える必要がある。富田が作るような具象的装飾が建築に少なく、抽象的なものが多いことについて、富田は次のように述べる。

「それがかつていってことになるんですけどね、今は。」*5これは、見たものをそのまま取り入れる具象的装飾は、自らの独自の思考や造形力を示せないとして忌避されている故ではないか。このこと等を踏まえ、現建築の傾向を次のように示した。

・建築家は施主の希望を満たすことや建築界内で生き残るために独自性を表現する必要性を求められる。

→建築は、客観性が認められづらい美的要素などを扱わずとも成立する。よって、より確実に必要性を満たせる技術の使用や空間の新表現、論理構造、経済効果など、客観的理解が得やすい領域に自らの基盤を作ることとなる。

一方、富田が扱ったのは、無意識的領域かつ共感的理解によって受け入れられる領域だった。そうして作った建築は、社会的客観性のもと反発を受けることがあったものの、施主等の共感的理解によって実現している。例えば次のような逸話がある。

・笠原小学校のような空間体験の実感が無い若者は、管理性・安全性等の社会的客観性に基づいて設計に反対意見を出した。一方、富田の設計基盤となった幼少・少女期の時代及びその時の空間を共有する世代の人達は、理解を示したという可能性について、富田は述べている。



図5. 笠原小学校 半屋外空間

・装飾は、施主らへの相談は特になくやってしまったというが、喜んでもらったという。→施主側にも小学校における体験があるがゆえに「小学校における装飾の楽しさ」という個人的実感が共有され、社会化・客観化が可能となった。



図6. 笠原小学校 装飾

このように、富田が回路として扱う「五感・感情」は社会的客観性の前には弱さがあるものの、共感的理解が得られた時受け入れられる。その理解は、個人の感覚から独立できず客観視できない。よって建築界全体の安定した「普遍」としては成立せず、象は独自の方向性を持った建築家として位置付けられる。しかし、富田及び象設計集団は、今日も建築設計を行っている。このことこそ、社会はそういった共感的理解領域への働きかけを建築によって受け入れる余地を持っていることの現れである。アール・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動の結果のように、これまで客観的理解領域外は、社会に対して敵対するものとして歴史を刻んできた。しかし、富田玲子は、それが建築として社会の一部で成立し得ることを示した。「共感的理解領域を社会的領域に、建築により刻む記録者」であるとして本論文の考察とする。

<参考文献>

- *1「建築文化」彰国社(1983.9)*2「新建築」新建築社(1983.9)p.209
- *3 富田玲子「小さな建築[増補新版]」みすず書房(2016)p.86,251
- *4 同上 p.298
- *5 巻末資料 富田玲子インタビュー(2022/09/12)p.9
- 本人の言説
- 著作
- 富田玲子「小さな建築[増補新版]」みすず書房(2016)
- 象設計集団「象設計集団(現代の建築家)」SD編集部編 鹿島出版(1987)
- 象設計集団「建築文化」彰国社(1993.10)
- 象設計集団「空間に恋して——象設計集団のいろはカルタ」工作舎(2004)
- 記事
- 富田玲子「問題はエネルギーの節約ではなく…」『建築雑誌』日本建築学会(1982.3)
- 富田玲子「来る世紀に残したいもの、残したくないものカタログ」『建築雑誌』日本建築学会(2001.1)
- 富田玲子「インタビュー 元祖×新鋭、建築ガールズトーク」『建築雑誌』日本建築学会(2008.8)
- 富田玲子・樋口裕康「インタビュー 場所に根ざして——Team Zoo Style/象設計集団の矜持」『建築雑誌』(2011.4)
- 富田玲子+樋口裕康×古谷誠章「われわれにできることは何か。」INAX REPORT No.185(2011.1)
- 富田玲子「結構面白い人生」『建築雑誌』日本建築学会(2017.5)
- 作品に関する雑誌
- ドーモ・アラベスカ
- 「都市住宅」1975秋(別冊,住宅第11集)
- 宮代町コミュニティセンター進修館
- 「建築文化」彰国社(1981.10)
- 名護市庁舎
- 「新建築」新建築社(1982.1)|「建築文化」彰国社(1982.1)
- 宮代町笠原小学校
- 「新建築」新建築社(1983.9)|「建築文化」彰国社(1983.9)
- 津山洋学資料館
- 「建築技術」建築技術(2010.4)
- 石川県九谷焼美術館
- 「建築設計資料 085 屋上緑化・壁面緑化」建築思潮研究所(2002.2)
- その他建築雑誌
- 「コンフォルト 1995 秋号」建築資料研究社
- 「ディテール 1975・7 季刊=夏季号」彰国社
- 比較対象
- 鈴木博之「建築の世紀末」晶文社(1977)
- 「様式の上にあれ 村野藤吾著作選」鹿島出版(2008)
- 「村野藤吾著作集 全1巻」鹿島出版(2008)
- 松葉一清「近代主義を超えて—現代建築の動向」鹿島出版(1983)
- 石山修武「秋葉原」感覚で住宅を考える」晶文社(1984)
- > 図版出典 >
- 図1. 富田玲子「小さな建築[増補新版]」みすず書房(2016) 背表紙
- 図2,3,4. 筆者作成
- 図5. 宮代町立笠原小学校 - トップページ - https://www.fureai-cloud.jp/kasasho/ (最終閲覧日:2022/11/07)
- 図6. 学生撮影